

⑬英雄の武器

人相術に基づく人物のいでたちにより、その人物の叙述が始まる前に、人物の印象を与える『演義』は、それぞれの武将にも、特別な武器を持たせることにより、武将の強さを表現している。

『演義』において、個人的武力としては最強と設定される呂布が手にする武器は、方天画戟である。三日月形の鋭い刃の部分で難くことも、先端の矛先により突くこともできる方天画戟は、戈の進化した型である。戈は、春秋戦国時代から発達し、後漢・三国時代には主力の武器の一つであった。董卓からもらった赤兔馬にまたがり、馬上で戦う呂布には、群がる歩兵を薙ぎ、相手の騎兵と矛で戦うのに理想の武器であったといえよう。もちろん、史書の『三国志』には、呂布の使用した武器に関する記録はないが、明の『三才図会』には「戟刀」として図が載せられている。

張飛が生涯愛用した蛇矛は槍で、『演義』の版本により、刃の部分が蛇行して描かれる場合と、まっすぐの場合がある。名を「点鋼矛」という。その長さは一丈八尺とされ、『演義』の書かれた明代の尺度で計算すると六m近くに及ぶ。通常、長柄の武器は三m以内が有効とされ、これほど長い槍は使えるはずはない。だが、張飛の身の丈は八尺、明尺では二六一cmとなる

⑭関羽と青龍刀

神である関羽の武器は、薙刀の一種である青龍偃月刀である。柄の先端が龍首に作られているので青龍といい、刃部が三日月に似た形であるから偃月刀と呼ぶ。関羽は、これを「冷豔鋸」と名付けた。冷やかな美しさを持つこのぎり、という名とは裏腹に、冷豔鋸はたいへん重く八十二斤(約五〇kg)あるとされる。大きな関帝廟では、多くの場合「刀楼」があり、青龍偃月刀を納めているが、たいがい触ることができない。関帝の胴体を埋葬している洛陽の関林の青龍偃月刀は、持つことができが、たいへん重く、持ち上げることができない。これを振り回すために必要な握力は七〇〇kgであるという。

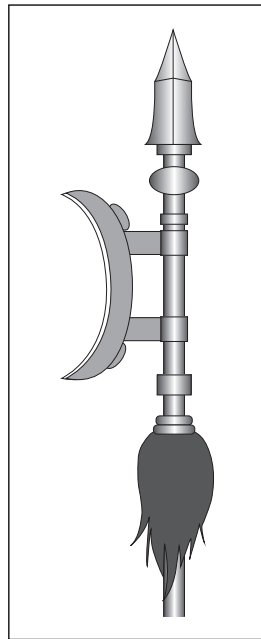
ヨーロッパの先住民族であるケルト人の英雄アーサー王は、エクスカリバー(Excalibur)という名剣を得ることににより「劍神」となり活躍するが、死に際してエクスカリバーをアバロン湖に投げ込んで死ぬ。劍神とは、剣を手に入れることで超人的な力を持ち、これを失って死を迎える英雄のことである。

中国小説では、如意棒を手に入れる孫悟空が典型的な劍神とされる。これに対して、『演義』では、冷豔鋸を馬商人からの資金援助により鍛練させており、神にもなったわけではない。また、死去の際に、青龍偃月刀を失って関羽の力がなくなる、という場面もない。関羽は、劍神としての性格を持つてはいな

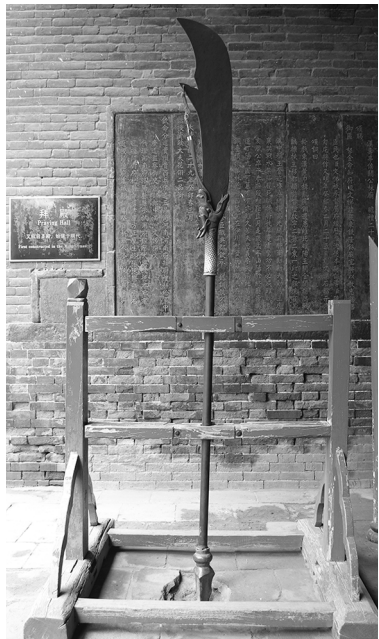
ため、一般的な事例に従う必要はあるまい。

趙雲がふだん使用する武器は、騎兵として戦うのに適した槍(民間伝説では涯角槍)である。帯びている青釭という劍は、もともと曹操の宝剣であった。長坂坡で一騎駆けをした折に、曹操から劍を預かっていた夏侯恩を一突きで倒して手に入れたものである。

劍は、春秋戦国時代の武器で諸刃である。漢代に片刃の刀が普及したことにより、劍は次第に減少した。しかし、劍は逆に神秘的な力を持つものとして尊重されるようになった。ちなみに、劉備が持つ雌雄一对の武器は劍であり、刀ではない。劉備の神聖性が、劍により表現されていると考えてよい。また、中国近世の小説では、雌雄一对の劍は、女性が持つことが多い。聖人君子とされ、泣いて天下を取ったと言われるようになる『演義』の劉備から、暴力性を削ぐ効果を持つている。



方天画戟



関林の青龍偃月刀

しかし、雑劇「劉関張桃園三結義」では、関羽が石をどけ、その下の刀を手に入れるという一段がある。また、嘉靖本の第二版には、関羽が呉軍の馬忠と戦っている際に、突然空中から「雲長よ、久しく下方に住んでおったが、これに玉帝の詔がある。凡夫との勝負にこだわるではない」との声がし、頓悟した関羽は、「刀馬を棄却して」神に帰ったとある。

さらに古くは、劉宋の陶弘景の『古今刀劍録』には、関羽が敗れたとき、刀を水中に投じたとの記述がある。関羽の冷豔鋸は、孫悟空の如意棒と同じように、関羽を「劍神」とするために劍だったのであろう。